保健科教育研究４：21-30, 2019

《資料》

性に関する対話的学びの展開に向けた学習者からみたよりよい保健授業の特徴

学生の既習状況および学習ニーズに着目して

石井里佳[1)]、木山慶子[2)]、霜触智紀[3)]

キーワード：性教育、質問紙調査、既習状況、学習ニーズ、対話的学び

Ⅰ．はじめに

保健授業において、生殖や男女の発育発達・性意識といった性に関する学習内容は、小中高全ての校種で組み込まれている。このことから、性教育にとって保健授業の役割は大きいことが窺える。しかし実際の保健授業における性教育には多くの課題がある。

学習者である子どもたちの実態としては、望まない妊娠や性感染症が依然として問題である。その背景に、わが国の高校生の約20%、大学生の約50%が性交を経験しており、高校生で毎回避妊をする者は約半数[12)]といった、高い性交経験率や不十分な避妊の実態がある。これらの健康問題の解決・改善のためには、適切な知識を身につけ、それらを活用した主体的な意思決定・行動選択ができる能力を培う保健授業を展開する必要があろう。

さらに、子どもたちの性に関する意識としては、中学生は性に対して快楽的表現や犯罪等に関連する嫌悪感などをイメージとして抱いている[10)]。その上、性嫌悪をもつ人は将来性交するという計画性が低く、性に関してオープンに話したり、性行動の前に避妊具を入手することができないなど不健康な行動をする危険性が高いこと[11)]が示されている。

このように、今日の保健授業における性教育では、学習者の知識の定着および、それらの知識を活用した主体的な意思決定・行動選択ができる能力の育成や、性に対して嫌悪感を抱かないためのよりよい授業を展開することが求められているといえる。加えて、授業を展開するにあたっては、新学習指導要領において取り上げられている学びの手段である、主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点を取り入れることが重要になろう。対話的な学習活動を通した学びを行うことで、学習内容が印象に残り、知識の定着につながると考えられる。しかし授業を行う教員の課題として、高校教員は「性教育の特質に起因する実施への躊躇」や「性教育を実施することの教諭自身の限界感」、「指導法の模索」といった指導への困難性をあげている[7)]。さらに中学・高校教員の半数以上が性教育のイメージとして心理的に抵抗感を抱いている[2)]。また学校教育における性教育には、2002年以降の性教育の学習内容に対する厳しい抑圧規制である「性教育バッシング」が起こり、性教育実践は萎縮し、後退している[1)]といった社会的背景がある。

このように授業を行う側である教員の課題が多いなかで、新たに対話的な学習活動を取り入れた授業を展開することは、戸惑いや実施への難しさがあるのではないか。

以上のような教員の性に関する学習指導への困難さを軽減するためには、学習者からみたよりよい保健授業における性教育の特徴や、学習者の性に関する対話についての意識を明らかにすることが必要であろう。それらを踏まえることで、講義型授業を行う場合でも、新たに性に関する対話的学びを取り入れた場合でも、効果的な保健授業の実施につながると考えられる。

そこで本研究では、学習者の性教育の既習内容や印象、学習ニーズおよび性に関する会話について調査することで、性に関する対話的な学びの展開に向けた学習者からみたよりよい保健授業の特徴について考察することを目的とする。

1）高崎市立高崎経済大学附属高等学校　2）群馬大学教育学部保健体育講座
3）新潟大学大学院現代社会文化研究科

Ⅱ．研究方法

1)調査内容

自記式質問紙調査を実施した。大学生の今まで受けてきた性教育の内容や印象といった既習状況および、現在希望する学習内容・学習形態といった学習者のニーズについて回答を求めた。加えて、対話的学びに関するニーズと、普段の性に関する会話の相手や頻度、内容について回答を求めた。

2)調査対象・期間

対象は、関東および九州地方の大学7校(国立4校、公立2校、私立1校)の学生で、調査協力が得られ、対象者情報に書きもらしがなかった462名(男子265名、女子197名)である(表1)。

期間は、2016年11月から2017年7月である。

表1　対象者情報

	人数	年齢		出身高校	
		Mean	SD	共学	別学
男子	265	19.08	1.36	183	82
女子	197	19.07	1.27	115	82

3)質問紙作成の手順

質問紙は、日本性教育協会が実施している「青少年の性行動調査」の中の質問項目として「性に関するイメージ」「性教育と性知識・情報」「友人関係」「メディア利用状況」を、中越ら(2010)[5]の質問項目として「性情報の入手先」「学習した・学習したい性教育内容」を、筆者独自の項目として「希望する授業形態」「印象に残る性教育授業」「嫌悪感・不快感を抱いた性教育授業」を加え、予備調査を通して、記入方法を修正した全13項目の質問紙を作成・使用した。回答方法は、有無を問うものおよび自由記述、「希望する授業形態(3件法)」以外は4件法で回答を求めた。

また性に関する学習内容は、男女の心身の違い等を扱うため、男女共学・別学という校種に起因して既習内容や望む授業形態などに違いがあると予想される。そこで、対象者情報として出身高校種の回答を求めた。

4)調査方法

大学の授業後および複数の大学との合同合宿や研修会において、その場で配布・送付し回収をした。

5)分析方法

データはSPSS Statistics24を用い、カイ二乗検定および、平均値の差の検定ではt検定後にTukeyの多重比較を行った。自由記述は文章分析ソフトKH Coderを用いた。品詞分析で使用した品詞は「名詞」「サ変名詞」「形容詞」「動詞」「形容詞」「副詞」である。

6)倫理的配慮

筆者が回答者に対し、調査結果を本研究の目的以外に使用することはないことや個人が特定されることはないこと、回答したくない質問には回答しなくてよいことを口頭および紙面にて説明し、回答・提出をもってその同意とした。回収した質問紙およびその結果に関しては、筆者が厳重に管理した。

Ⅲ．結果・考察

1．既習内容と印象

1)既習した性教育内容

今まで受けた保健授業の性教育で、学習した内容として当てはまるものについて回答を求めた。

「性感染症447人(96.8%)」が最も多く、「性の生理学的側面」「性行為・付随側面」に関する内容が多かった(表2)。また、高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編(2009)[4](以下指導要領)に記載されている内容でも学習したと回答していない対象者がみられた。

これらのことから、過去に学習した内容でも、現在覚えていない場合が少なくないことが推察される。性知識は、学習してから実際にその知識を活用するまで期間が空くことが予想される。つまり、知識の定着として、長期間にわたって内容を覚えていることが、性の健康にとって不可欠であろう。

さらに、男女比較としてカイ二乗検定を行ったところ、「初経($\chi^2(1)=12.45$)」「精通($\chi^2(1)=22.75$)」「月経($\chi^2(1)=11.32$」「射精($\chi^2(1)=13.53$)」($p<.01$)などの計11項目で、有意差がみられた。特に、男子で「精通」「射精」、女子で「初経」「月経」といった自身の性に関する内容の方が既習内容の回答が多かったことから、学習内容を印象づけるためには、学習内容を学習者にとって関係が深いと思わせることが重要であると考えら

れる。

表2　既習内容と男女比較

		男子(N=265) ①共学校(N=183)	男子(N=265) ②男子校(N=82)	女子(N=197) ③共学校(N=115)	女子(N=197) ④女子校(N=82)	計(N=462)	χ^2検定
性の生理的側面	初経	162	73	112	80	427	**
	精通	160	71	79	57	367	**
	月経	171	76	115	81	443	**
	射精	170	78	96	67	411	**
	第二次性徴	149	68	92	67	376	
	性器	165	78	97	75	415	
	生命誕生	157	73	104	72	406	
性行為・付随側面	セックス	144	70	71	53	338	**
	避妊法	168	74	107	74	423	
	エイズ	174	77	114	80	445	
	性感染症	175	78	114	80	447	
	妊娠・出産	167	76	108	80	431	
	人工妊娠中絶	153	62	97	73	385	
性の心理・倫理的側面	思春期心理	159	68	100	81	408	**
	心理と行動	143	62	90	73	368	
	性役割	136	54	75	61	326	
	性相談所・相談方法	114	52	51	57	274	**
	愛とは何か	80	38	35	24	177	*
	性欲処理	118	52	42	37	249	**
	異性交遊法	94	43	38	22	197	**
	性の意識	131	58	68	54	311	
	同性愛	94	52	45	31	222	**
	デートDV	112	52	71	52	287	
	セクシュアルハラスメント	144	65	89	62	360	
	性に関する医療機関	110	46	58	48	262	

*$p<.05$　**$p<.01$　(人)
網掛け太字は回答率が90%以上のもの

トワークで多く頻出された語のまとまりから授業内容の特徴を整理した。

その結果、総抽出語数は1861語確認でき、そのうち分析に使用した語数は582語であった。うち頻出50位の単語を表3に示す。

表3　印象に残る性教育授業における抽出語

総抽出語(使用):1861(582)

抽出語	回数
先生	36
する	32
授業	20
話	19
講師	15
印象	13
外部	13
エイズ	12
女子	9
保健	9
衝撃	8
体育	8
感染	8
妊娠	7
ビデオ	7
コンドーム	6
月経	6
内容	6
講話	6
指導	6
中絶	6
覚える	6
残る	6
思う	6
受ける	6
話す	6
なる	6
出産	5
聞く	5
自分	5
生徒	5
おもしろい	5
ある	5
言う	4
講義	4
映像	4
男子	4
ない	4
面白い	4
感じる	3
見る	3
行う	3
集める	3
怖い	3
リアル	3
はずかしい	3
講演	3
治療	3
性行為	3
誕生	3
教科書	3
使い方	3
人工	3
生命	3
全校	3

2)印象に残る授業

今まで受けた保健授業における性教育で印象に残るものがあるか回答を求めた。

印象に残る授業があると答えたものは、87名(18.8%)であった。また、男女で有意な差はなかった。

さらに、印象に残る授業内容として、101件(男子57件、女子44件)の自由記述が得られた。印象に残る授業の内容や印象を把握するために、文章分析ソフトのKH Coderを用いて各品詞を抽出し、その頻出回数を明らかにした。次いで、共起ネッ

共起ネットワーク(図1)は、単語を結ぶ線が太いほど関連が強く、「水色、白、ピンク」の順に媒介中心性が強く、円が大きいほど語の出現率が高いことを意味している。図1では、「シーン」「残る」「出産」がピンク色であり、濃淡はあるが他の色つきの単語は水色であった。この共起ネットワークの語のまとまりと、実際の自由記述の文章的意味合いが同様で特徴的な以下の5つのカテゴリに整理できた(表4)。

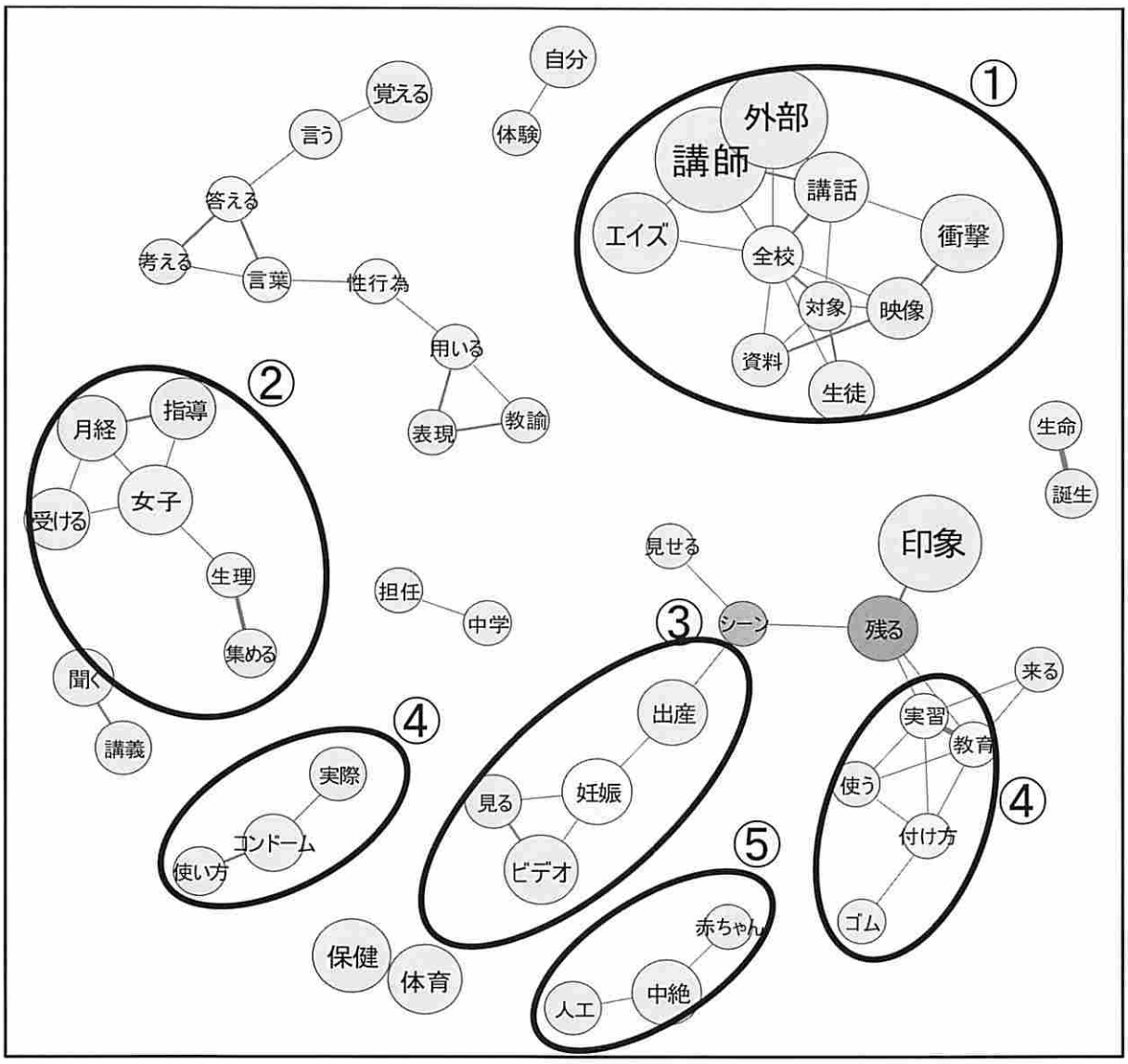

図１　印象に残る性教育授業共起ネットワーク

表４　印象に残る性教育授業の特徴

カテゴリ	例(原文ママ)
① 外部講師による全校講和	外部講師の先生の、エイズに関する全校生徒対象の講話での映像資料が衝撃的だった
② 女子の月経指導	臨海学校の直前に女子だけで集められ、生理用品を一人1セットずつ配られ、月経指導を受けた。
③ 妊娠・出産に関する視聴覚資料	妊娠・出産の流れを覚えた。ビデオを見て生命の誕生に感動した。(保健体育の先生)
	妊娠や出産に関する生々しい映像
④ コンドームに関する教材	コンドームの使い方を詳しく真剣に話してくれた講師がいた
⑤ 人工妊娠中絶	妊娠中絶についてのビデオが話の授業を受けた時に、自分が思っていた以上の衝撃を受けました。

学習者からみた科目保健のよりよい授業の特徴の１つとして「印象に残る」のカテゴリがある[7]。しかしながら本研究で印象に残る性教育授業があると答えたものは約２割にとどまった。

さらに印象に残る性教育授業の特徴では、カテゴリ①、②のような、養護教諭や外部講師による指導や講話といった「普段と異なる特別な授業形態」やカテゴリ③、④、⑤のような「性行為・付随側面」に関する学習内容が多くあげられた。

さらに、「妊娠・出産」という同様の学習内容の視聴覚教材に対して、「魅力的など肯定的」と捉えられる記述と、「衝撃的・生々しいなど否定的」と捉えられる記述があった。つまり、同じ学習内容

でも、その教材や指導方法、学習者の実態などによって異なる印象を与える場合があり、学習内容を肯定的に印象づけるためには、生徒の実態を考慮して教材を選定する必要があると考えられる。

3)嫌悪感・不快感を抱いた授業

今まで受けた保健授業における性教育で嫌悪感・不快感を抱いた経験について4件法で回答を求めた。

その結果、経験がある(あまりない・たまにある・とてもある)と回答したものは男子 195 名(74.4%)、女子 162 名(84.8%)であった(表5)。

また、全くない(1 点)～とてもある(4 点)として男女で平均点の比較を行った結果、男子(Mean=1.97 、 SD=0.73) 、 女 子 (Mean=2.13 、SD=0.68) t(451)=-2.389 $p<.05$ で女子の方が有意に高かった。

表5　嫌悪感・不快感を抱いた経験

		男子 (N=262)	女子 (N=191)	計 (N=453)
経験なし群	全くない	67 (25.6)	29 (15.2)	96 (21.2)
経験あり群	あまりない	143 (54.6)	112 (58.6)	255 (56.3)
	たまにある	45 (17.2)	46 (24.1)	91 (20.1)
	とてもある	7 (2.7)	4 (2.1)	11 (2.4)

人(%)

さらに、出身校種別に見ると、「男子校(Mean=1.83、SD=0.652)」と「女子共学校(Mean=2.15、SD=0.647)」の比較において「女子共学校」の方が嫌悪感を抱いた経験が多かった(F=3.593*)(表 6)。

表7　嫌悪感を抱いた授業における抽出語

総抽出語(使用):1021(301)

抽出語	回数
男子	20
授業	11
生徒	
生々しい	9
下品	8
嫌	
悪い	7
言う	
気持ち	6
女子	
中学	
男女	5
聞く	
教科書	4
先生	
内容	
妊娠	

抽出語	回数
クラス	3
一緒	
気まずい	
高校	
性器	
中絶	
話す	
まじめ	2
イヤ	
ニヤニヤ	
ビデオ	
感じる	
記憶	
教育	
教師	
見える	

抽出語	回数
見る	2
考える	
自分	
真剣	
人工	
性教育	
正直	
男性	
知る	
恥ずかしい	
怒る	
読む	
発言	
雰囲気	
話	

次いで、嫌悪感・不快感を抱いた授業内容として、70 件の自由記述が得られた。

「2)印象に残った性教育内容」と同様の手順で分析を行った結果、総抽出語数は 1021 語で、うち分析に使用したものは 301 語であった(表7)。

共起ネットワーク(描画数 60)(図2)から4つのカテゴリに整理できた(表8)。

図2では「先生」の単語のみピンク色であり、濃淡はあるが他の色つきの単語は水色であった。なお破線で囲まれた語のまとまりは、他の語とも関連があるが、特定の意味合いとして似ている自由記述が複数あり、カテゴリに分類できたものである。

表6　嫌悪感・不快感を抱いた経験を得点化した平均点（出身校種別）

男子				女子					
①共学校		②男子校		③共学校		④女子校		F値	多重比較 Tukey法
Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
2.03	0.76	1.83	0.65	2.15	0.65	2.10	0.71	3.593*	②<③

$p<.01$　(点)

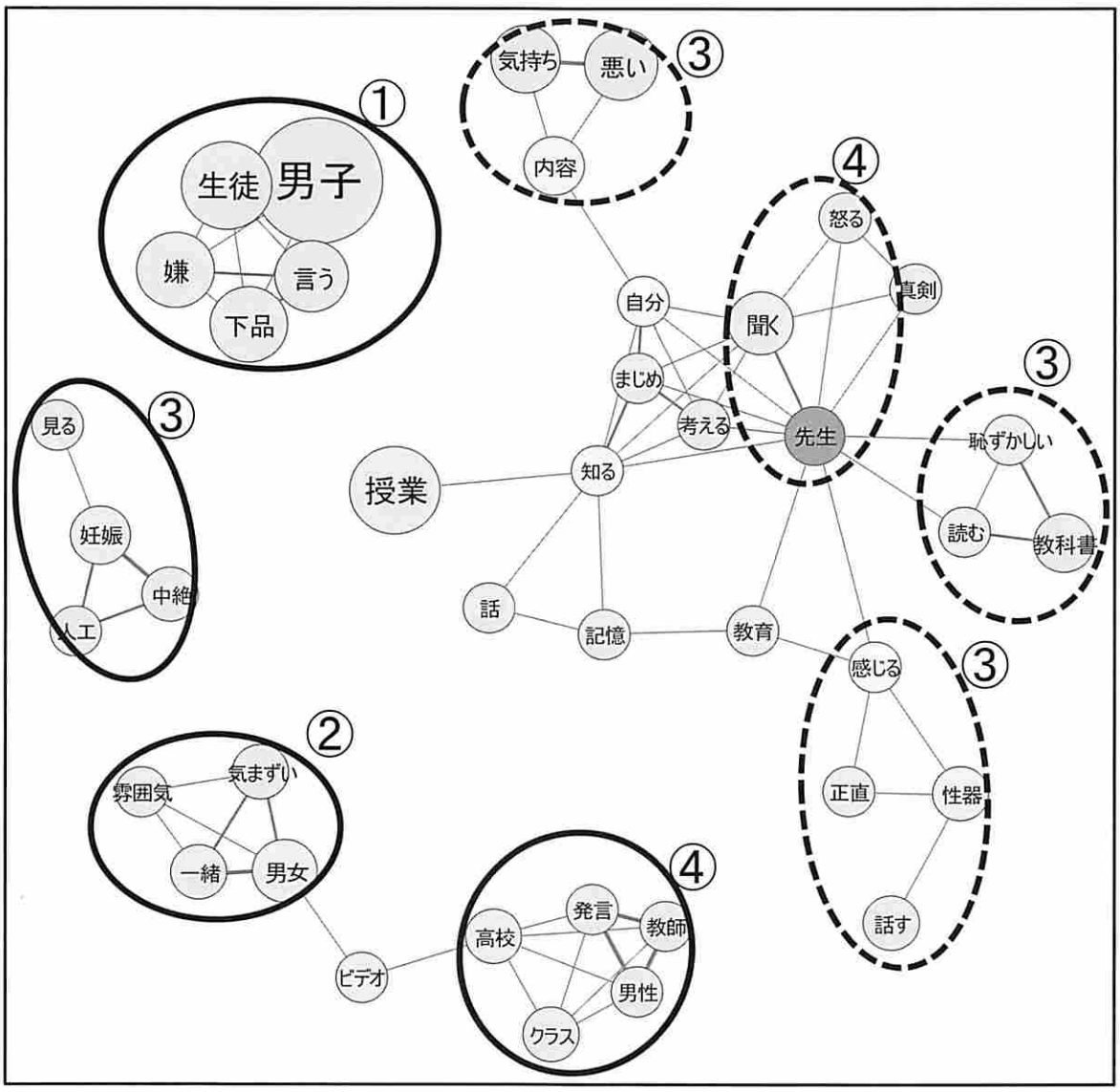

図 2 嫌悪感を抱いた性教育授業共起ネットワーク

表 8　嫌悪感を抱いた性教育授業の特徴

カテゴリ	例(原文ママ)
① 多くが男子生徒の「下品」と捉えられる言動	男子生徒・児童はふざけたり、下品なことを言うので、同じ教室でこの内容を学習したくないとかんじました。
② 授業後の異性への関心の高まりや気まずさ	男女が一緒だったのでとても気まずかった。
③ 「生々しい」と捉えられる視聴覚教材	臓器の断面図は見られなかった。妊娠、出産のDVDがモザイクなしでみたくなかった。
④ 「下品」と捉えられる言動や威圧的な態度	高校の時の男性教師の発言が下品で、それを笑っているクラスが気持ち悪かった

以上の結果から、約 8 割が嫌悪感・不快感を抱く性教育授業を経験しており、特に男子よりも女子の方が多いことが明らかになった。その背景として、中学生の性に対するイメージについて、女性は性行動のリスクとして、妊娠や出産が自分の身に起こるために切迫した感情を抱き、性犯罪の被害者となり得る場合も男性に比べ多いために、嫌悪的でネガティブなイメージを持つ[10]ことが考えられる。本研究の抽出語とその頻度をみても、「男子＋生徒」という使われ方が多く、出身校種別にみても「女子共学」「女子校」出身者の方が嫌悪感を抱いた経験が多いことから、小中学校時の男子生徒や男女一斉指導に関連するネガティブな印象が残っていることが推察できる。

さらに「生々しい」「下品」「嫌」「気持ち悪い」「気まずい」「恥ずかしい」といった表現や、「教

科書」「妊娠」「人工妊娠中絶」「性器」といった教材・学習内容が多くみられた。

以上のことから、嫌悪感・不快感につながらない授業として、教師自身や特に男子生徒が、他の生徒に「下品」と捉えられる言動を行わないことや、教師は「生々しい」と捉えられるような教材を避け、授業形態を学習内容や生徒の実態に応じて工夫するとことが重要であると考えられる。

2. 性教育に関する学習ニーズ

1)学習したい性教育内容

現在学習したいと思う学習内容について回答を求めた。

男子では「愛とは何か 47 人(18.5%)」「異性交遊法 35 人(13.2%)」の順であり、女子では「愛とは何か 36 人(18.3%)」「デートＤＶ・性に関する医療機関 29 人(14.7%)の順であった。

全体では、「愛とは何か 85 人(18.4%)」が最も多く、次いで「異性交遊法 59 人(12.8%)」であり、多い順で 7 つまで「性の心理・倫理的側面」の内容であった。

これらの結果から、既習内容とは異なり「性の心理・倫理的側面」のニーズが高いことが明らかになった。さらに、女子で「同性愛」「デートＤＶ」「性に関する医療機関」といった交際や性行為に関する内容のニーズが高かった。その理由として、本対象者は学生であり、性行動が活発化する時期であるため、性的なコミュニケーションに関する知識を求めていることが考えられる。これらのことから、高校生段階においても「性の心理・倫理的側面」の内容を補完する必要があると推察される。

2)希望する授業形態

性教育の授業を受ける際に希望する授業形態について 3 件法(「そう思う(3 点)」「どちらでもない(2 点)」「そう思わない(1 点)」)で回答を求めた。

まず、男女ともに「同性教師」の平均点数が高かった。男女比較では、女子の方が「男女一斉の授業」「異性の教師」の点数が有意に低く、「男女別の授業」「同性教師の授業」「養護教諭の授業」が有意に高かった(表 9)。

校種別にみても、特に「男子共学」よりも「女子共学・女子校」の方が「男女一斉」「異性教師」の授業に否定的であった。

表 9　希望する授業形態

		男子				女子					
		①共学校		②男子校		③共学校		④女子校		F値	多重比較 Tukey法
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
授業形態	男女一斉	2.13	0.83	1.86	0.79	1.70	0.74	1.60	0.77	11.00**	①>③④
	男女別	2.18	0.81	2.41	0.76	2.57	0.67	2.68	0.61	10.65**	①<③④
	単一学級	2.38	0.76	2.23	0.81	2.35	0.74	2.39	0.73	0.88	
	複数学級	1.83	0.77	2.05	0.82	1.83	0.75	1.78	0.71	2.03	
教員の特性	同性教師	2.38	0.70	2.41	0.72	2.65	0.58	2.77	0.45	9.07**	①>③④ ④>②
	異性教師	1.84	0.69	1.64	0.72	1.48	0.58	1.41	0.45	11.18**	①>③④
	保健体育教師	2.40	0.70	2.24	0.76	2.48	0.64	2.44	0.66	1.91	
	養護教諭	2.15	0.67	2.08	0.76	2.43	0.69	2.58	0.60	10.72**	①<③④ ②<③④
	外部講師	2.25	0.74	2.35	0.73	2.23	0.71	2.27	0.72	0.43	

**$p<.01$　(点)

これらの結果から、男女ともに「同性教師」による授業のニーズが高く、かつ女子の方が「男女別」「同性(女性)教師」「養護教諭」の授業を望んでいることが明らかになった。先行研究においても、高校生は、男女別での性教育に関する集団講話について「落ち着いて聞けた」「気兼ねしないで聞けた」などの理由から「良かった」と回答するものが多かった[6)]。

しかしながら、指導要領において「異性を尊重する態度が必要であること(中略)を理解できるようにする。」と示されている通り、男女の心身の違いを学ぶ機会として男女一斉授業の意義はあると考えられ、教師は 1 時間ごとの授業のねらいに応じて学習形態の工夫をする必要があると推察される。

3)同世代と性について知る・語るニーズ

対話的学びに関するニーズとして、「同世代の性についての考えを知りたい」「同世代と性について意見交換をしたい」について 4 件法で回答を求めた。

「同世代の性についての考えを知りたい」では「知りたい群(やや思う・とても思う)」が 55.5%、「同世代と性についての意見交換をしたい」では「したい群(やや思う・とても思う)」が 46.8%であった(表 10)。また男女で有意な差はみられなかった。

表 10　性について知る・語るニーズ

		したくない		したい	
		全く思わない	あまり思わない	やや思う	とても思う
同世代の性ついての考えを知りたい	計	34 (7.6)	166 (37.0)	204 (45.4)	45 (10.0)
	男子	23 (8.8)	80 (30.8)	129 (49.6)	28 (10.8)
	女子	11 (5.8)	86 (45.5)	75 (40.0)	17 (9.0)
同世代と性ついて意見交換をしたい	計	31 (7.0)	203 (46.1)	175 (39.8)	31 (7.0)
	男子	16 (6.4)	102 (40.6)	114 (45.4)	19 (7.7)
	女子	15 (7.9)	101 (53.4)	61 (32.3)	12 (6.3)

人 (%)

性について知る・語るニーズはともに約半数にとどまった。その理由の１つとして、「学校は公的な場であるのに対して、セクシャリティは私的で個人的で隠すべき事柄だとみなされてしまう」[3]という意識があることが考えられる。「知りたい」より「意見交換をしたい」のニーズが少なかったことからも、対象者は学校や授業という公の場で性について語ることのイメージができず、抵抗感や違和感があることが推測される。

さらに、「1. 2)印象に残る授業」の自由記述において、生徒同士で意見交換をするような対話的な学習活動に関する記述がなかったことから、本対象者は性に関する対話的な学びの経験が少ないことが推察される。そのため、性について知る・語る学びの方法やねらいを理解しておらず、難しいことと考えているのではないか。

その一方で、約半数のニーズがあったともいえる。その理由として、若者は自身の性に関する情報不足を感じていること[9]や、若者の性に関する相談相手は男女共に「友人」が最も多いこと[12]が考えられる。つまり、性について語る経験やイメージがないものの、友人や近い価値観を持っている同世代とならば、性についての意見交換をしたいと考えたのではないか。

3. 性に関する会話

まず、性に関する会話の相手として「家族」「同性の友人」「異性の友人」「先輩」における、それぞれの会話の頻度「まったくしない」「あまりしない」「たまにする」「よくする」について回答を求めた。

その結果、「同性の友人」において「する群(たまに・よくする)」が男子 80.4%、女子 63.1%と最も多かった。

続いてその会話の内容について回答を求めた。「同性の友人」の会話の内容をみると、「性の生理学的側面」「性行為・付随側面」「性の心理・倫理的側面」と様々な内容の会話をしていた(表 11)。

さらに、「同性の友人」との会話において女子同士で「初経($\chi^2(1)=13.92$)」「月経($\chi^2(1)=44.90$)」、男子同士で「精通($\chi^2(1)=85.50$)」「射精($\chi^2(1)=92.78$)」の回答が多かった。また「異性の友人」との会話では「射精($\chi^2(1)=5.62$)」について男子よりも女子の方が有意に多かった(表 12)。

表 11　同性の友人との会話内容

		同性の友人 計	男子	女子
性の生理学的側面	初経	98	40	58
	精通	76	70	6
	月経	159	45	114
	射精	138	127	11
	第二次性徴	68	56	12
	性器	142	123	19
	生命誕生	76	54	22
性行為・付随側面	セックス	243	173	70
	避妊法	180	119	61
	エイズ	93	77	16
	性感染症	113	89	24
	妊娠・出産	134	73	61
	人工妊娠中絶	70	49	21
性の心理・倫理的側面	思春期心理	96	71	25
	心理と行動	90	66	24
	性役割	70	56	14
	性相談所・相談方法	56	48	8
	愛とは何か	110	75	35
	性欲処理	124	121	3
	異性交遊法	97	74	23
	性の意識	97	77	20
	同性愛	98	66	32
	デートDV	68	46	22
	セクシュアルハラスメント	79	50	29
	性に関する医療機関	44	34	10

(人)

網掛け黒太字は全体の20%、網掛け白字は50%以上

表 12　男女での会話の内容の比較

		同性の友人 男子	女子	χ^2検定	異性の友人 男子	女子	χ^2検定
初経	する	40	58	**	15	250	
	しない	225	139		6	191	
精通	する	70	6	**	9	256	
	しない	195	191		10	187	
月経	する	44	221	**	32	233	
	しない	114	83		19	178	
射精	する	124	141	**	11	254	*
	しない	11	186		19	178	

*$p<.05$　**$p<.01$　(人)

これらの結果から、対象者は普段から同世代の友人と様々な性に関する内容を話していることや、

自身と異なる性に関する話題であっても意識的に異性と話していることが明らかになった。つまり、性について知る・語ること自体をしたくないのではないと解釈できる。

よって、対話的な学びを性教育で行う際は、その学習のやり方や意義・ねらいなどを説明するなど、生徒の学習経験などの実態を踏まえた配慮が必要であると考えられる。

Ⅳ. 結論

本研究では、学習者の性教育の既習内容や印象、学習ニーズおよび性に関する会話について調査することで、性に関する対話的学びの展開に向けた学習者からみたよりよい保健授業の特徴について考察することが目的であった。

その結果から、以下の6つの授業の特徴が得られた。

1. 学習内容が、学習者自身と関係が深いと捉えられる工夫をしていること。
2. 学習内容について性の心理・倫理的側面を補完していること。

この2点を、対話的学びの学習内容として考慮することで、知識の定着につながるとともに、学習者の学習ニーズを満たすと考えられる。

3. 外部講師や養護教諭との連携授業や、学年や全校での講話を組み合わせていること。
4. 授業のねらいや学習者の実態に応じて、男女別授業や同性グループの編成、同性教師からの学習指導などの工夫をしていること。

この2点を、対話的学びの授業形態として考慮することで、知識の定着や、性について自分の考えを語ることの抵抗感の軽減につながると考えられる。

5. 生々しいと捉えられる視聴覚表現を避け、提示する場合は事前に説明などをしていること。
6. 対話的な学習の進め方やねらいなどを説明していること。

この2点を、対話的学びの学習活動の資料の提示や説明の段階で考慮することで、学習者が性に対して嫌悪感や不快感を抱かないことや、対話に主体的に参加しやすくなることが考えられる。

本研究では、対話的学びのための学習者からみたよりよい性教育授業の特徴6点を示すことができた。今後の課題としては、今回考察した特徴を踏まえた性に関する対話的学びを取り入れた保健授業の実践と評価を行う。

引用・参考文献

1)橋本紀子・篠原久枝・田代美江子・鈴木幸子・広瀬裕子・池田壽夫・艮香織・小宮明彦・渡部真奈美・茂木輝順・森岡真梨：日本の中学校における性教育の現状と課題，女子栄養大学機関リポジトリ教育学研究室紀要，教育とジェンダー研究，9巻：pp. 3-20，2011.

2)池田優子・香月毅史・杉原喜代美・栗田佳江・中原國子・山下博子：A県における中学校・高等学校教員の性教育に関する意識調査，日本看護学会論文集地域看護，41巻：pp. 316-318，2011.

3)子安潤・山田綾・山本敏郎：学校と教室のポリティクス－新民主主義教育論－，清風堂書店フォーラム・A：p90，2004.

4)文部科学省：高等学校学習指導要領解説保健体育編，2009.

5)中越利佳・草薙康城・宇都宮温子・今村朋子・永江真弓：高校生の性知識と性情報についての調査報告，愛媛県立医療技術大学紀要，第7巻第1号：pp. 37-44，2010.

6)仁木雪子:高校生を対象とした男女別性教育の可能性，母性衛生，第48巻3号：p202，2007.

7)岡本麻代・齊藤佳余子・永山くに子：性教育をめぐる高等学校教諭の意識と検討―ピアエデュケーションの視点―，母性衛生，第54巻4号：pp. 548-555，2014.

8)白石龍生・白石大悟：科目保健の生徒による授業評価についての研究，大阪教育大学紀要第Ⅴ部門，第62巻第1号：pp. 71-78，2013.

9)劔陽子：若者の望む性に関する情報についての質問紙調査，思春期学，2巻3号：pp. 423-429，2004.

10)上田邦枝：中学生が抱く「性のイメージ」分析―生命と性の健康教育に向けて―，昭和大学保健医療学雑誌，第12号：pp. 54-62，2014.

11)William，F. A. A：Psychological Approach

to Human Sexuality : The Sexual Behavior Sequence. In D. Byrne&K. Kelley (Editors) Approaches to the Study of Sexual Behavior. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, Hillsdale, New-Jersey, 1986.
12) 財団法人日本児童教育振興財団内日本性教育協会 :「若者の性」白書第 7 回青少年の性行動全国調査報告, 小学館, 2011.